

フタスジチョウ

Neptis rivularis

タテハチョウ科



フタスジチョウ

チョウ標本：吉原利之氏作成・所蔵

名前の由来

翅の模様が2本の白い筋のように見えることに由来する。チョウという言葉はもともと「漢語」から取り入れたものである。漢字名：二筋蝶

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
鳥類
ワシ・タカ

特定種

該当なし。

形態的特徴

黒褐色に白く太い帯模様が入った、ミスジチョウの仲間。フタスジチョウの後翅表面の白帯は1本である。大きさはモンシロチョウ程度。

類似種と見分け方

ミスジチョウ属のチョウ。

ほかのミスジチョウ属の後翅表面の白帯は2本。



フタスジチョウ。表（左がオス、右がメス）



類似種、コムスジ。表（左がオス、右がメス）



類似種、コムスジ。ウラ（左がオス、右がメス）



フタスジチョウ。ウラ（左がオス、右がメス）

チョウ標本：吉原利之氏作成・所蔵

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
卵期					■							
幼虫期	■	■				■	■	■	■	■	■	■
蛹期		■	■									
成虫期			■	■	■	■						

生育環境・分布

湿性草原や露草地、人家周辺の明るい環境。個体数が多いのは低山地の沢沿い。

分布：国外分布は、ユーラシア大陸北部。国内分布は、北海道、本州（秋田県、岩手県、福島県南部から中部山

岳）。北海道内分布は、全域。

十勝地方では、平野部から山間部まで広く分布し、数も多い。

繁殖生態・寿命

年1回発生。成虫は6月中旬～8月に見られる。越冬態は普通3齢幼虫。

産卵は食草に翅を半開きの状態で腹部を軽く曲げ、葉の表に1卵ずつ産みつける。

幼虫は初め中脈を残して葉を食い、8月下旬ごろ袋状の巣をつくる。越冬は巣をそのまま枝にくくりつけ、主に3齢で行われる。越冬後は空の巣が多く、冬期の死亡率は高いと思われる。

越冬から覚めた幼虫はしばらくは越冬巣を使うが、成長後は巣を捨て枝に台座を造るようになる。蛹の多くは食樹の枝で見つかる。寿命：不明。

他生物との関わり

*幼虫はホザキシモツケ、エゾシモツケ、シモツケ、ユキヤナギ、コデマリを食樹・食草とする。

*成虫の吸蜜植物としてホザキシモツケ、アマニュウ、クガイソウなどの他多くの種が確認されている。

*成虫がミミズやカエルなどの死体や動物の糞、ヒトの汗などにも集まることが知られている。

*天敵は知られていない。

幼虫の食性（食樹・食草）

ホザキシモツケ、エゾシモツケ、シモツケ、ユキヤナギ、コデマリ。



ホザキシモツケ。フタスジチョウ幼虫の食樹の一つ

興味深い話

■フタスジチョウには後翅裏面の白い帯の模様があるが、この帯の太さは北海道産が明らかに太く本州産では細い。同じチョウでも地域によって形態が異なることを地域変異と呼ぶが、北海道産の方が美しく感じる人もいる（←北海道の人）。

■北海道では全域に分布するが、本州では関東・中部以北の1000m以上の山地に見られるという。

■十勝地方のアイヌ語では、チョウ類一般を「マレウレウ」という。



フタスジチョウ

配慮事項

ホザキシモツケなどの食樹・食草の自生する場所が必要。

参考文献

「原色蝶類検索図鑑」猪又敏男 北隆館 1990

「日本のチョウ」海野和男、青山潤三 小学館 1981

「原色昆虫大図鑑Ⅰ（蝶蛾編）」北隆館 1978

「名前といわれ昆虫図鑑」栗林慧 大谷剛 偕成社 1987

「十勝の蝶」大和与三追悼集 十勝蝶の会 1993

「埼玉蝶の世界 埼玉昆虫談話会編」埼玉新聞社 1984

「北海道の蝶」永盛拓行・永森俊行・坪内純・辻規男 北海道新聞社 1986

「原色日本蝶類生態図鑑（Ⅲ）」福田晴夫・浜柴一 他 保育社 1983

「北見の蝶」木村辰正 北見市教育委員会 1994

「コタン昆虫記（4）チョウ篇」井上寿 十勝地方史研究所 1988

「知里真志保著作集 別巻Ⅰ 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」知里真志保、平凡社 1976

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）
草花

（外来種）
草花

哺乳類

（水辺）
鳥類

（草原・樹林）
鳥類
ワシ・タカ